

第3章 江蘇・浙江の経済成長と発展モデル

はじめに

長江の下流に位置し上海を南北に挟む江蘇省と浙江省は、中国の伝統的農業の中心地域であつたが、一九七〇年代末に確立された改革路線の下で急速な経済成長を遂げ、華南地域の広東省、福建省と並び、中国経済を支える新たな柱の一つとして成長した。九〇年代に入ってから、上海の浦東開発が今世紀最大のナショナル・プロジェクトとして打ち出されたことによつて、上海の後背地にあたる両省はますます注目を集めるようになった。

本章ではまず江蘇省、浙江省経済の全体図を把握するために、一九七〇年代末からの経済成長の流れと中国経済における両省の位置づけの変化を概観する。次に、同地域経済成長のメカニズムを、成長の担い手、資本構造、市場構造などの側面から分析する。そして最後に、浦東開発とのリンケージの観点から江蘇省、浙江省と上海の経済関係について検討する。

第1節 一九八〇年代中国経済成長のリード役

江蘇省、浙江省は温暖な気候と豊富な雨量で農業の耕作にきわめて良い条件に恵まれており、伝統

的に「魚米之郷」と称される中国の最も重要な穀倉地帯である。また、教育レベルが高く商才に富む人材が多いために、両省は紡績や機械、金融など中国近代産業発祥の地として工業とりわけ消費財産において一定の技術蓄積と産業基盤を有した。このため両省は、建国までは中国の最も発達した地域の一つであった。

しかしその後、経済改革までの約三十年間において、中国の国家建設の重点は東北および内地地域に置かれていたため、江蘇省と浙江省の経済開発には大きな進展がみられなかった。たとえば、第一次五カ年計画期（一九五三～五八年）において、中国は一五六件の国家重点建設プロジェクトを実施したが、そのうち江蘇省と浙江省に配置するものは一件もなかった。それのみならず、建国前に両省に一定の工業蓄積があったことから、国家重点建設のために両省、とりわけ江蘇省から内地地域への経営幹部や技術者、熟練工、機械設備などの移転が要求された。¹⁾この結果、一九五二～七八年における江蘇省と浙江省の経済成長率（実質国民収入ベース）はそれぞれ全国平均の六%を下回って五・六%、五・七%にとどまった。江蘇省と浙江省は中国の最も豊かな地域でありながら、国民経済におけるインパクトはきわめて限られたものであった。

1 発展の初期条件と地域経済発展戦略の展開

発展の初期条件

江蘇省と浙江省は一九七〇年代の高度成長を迎える前に、以下の三点に集約できる初期条件を備えていた。

(1) 農業中心の地域経済構造

一九七九年の江蘇省と浙江省の産業別GDP構成における第一次産業の比率をそれぞれ生産額ベースと就業者ベースで見ると、江蘇省は三四・六%、七二・九%で、浙江省は四三・二%、七五・七%⁽²⁾ (表3-1)となっており、ともに全国平均を大きく上回っている。農業、とりわけ米や綿花などを中心とする耕種農業は両省の地域経済を支える重要な柱となっていた。また、中国の主要な穀倉地帯として、江蘇省、浙江省の農業は中国経済に大きなインパクトをもっている。国家統計局の発表した統計にもとづいて計算すると、江蘇省と浙江省は土地面積の合計で全国のわずかに二・一%にすぎないが、七九年の中国の穀物と綿花の生産量に占める比率ではそれぞれ一二・七%、二七・三%に達していた。

表3-1 江蘇、浙江経済発展の初期条件 (1979年)

| | 国土面積 (%) | 人口 (%) | 人口密度 (人/㎢) | 1人当り 耕地面積 ¹⁾ (μ-/人) | GDP構成 ²⁾ (%) | | |
|-----|----------|--------|------------|--------------------------------------|-------------------------|------------|------------|
| | | | | | 第1次産業 | 第2次産業 | 第3次産業 |
| 江蘇省 | 1.07 | 6.01 | 574 | 1.37 | 34.6(72.9) | 47.0(17.7) | 18.4(9.4) |
| 浙江省 | 1.06 | 3.88 | 373 | 0.83 | 43.2(75.7) | 40.9(14.6) | 15.9(9.7) |
| 全 国 | 100.00 | 100.00 | 102 | 1.86 | 31.5(69.9) | 47.9(17.9) | 20.6(12.2) |

(注) 1) 農村人口ベース、1978年のデータ。1μ=666平方メートル。

2) GDP構成は生産ベース。カッコ内に就業者ベースを示す。

浙江省の就業者構成は各資料により推計。

(出所) 国家統計局編『中国統計年鑑』、中国統計出版社；浙江省統計局編『浙江統計年鑑』、中国統計出版社、および江蘇省統計局編『江蘇統計年鑑』、中国統計出版社、以上各年版より作成。

(2) 高い人口密度と余剰労働力の存在

江蘇省と浙江省はともに面積の小さい省で、北京、天津、上海といった直轄市を除く全国二八の省のうち、台湾省、海南省、寧夏回族自治区の三省・自治区のみを上回りそれぞれ二四位と二五位となっている。しかし一方、全国の総人口に占める比率で見ると、江蘇省は五位、浙江省は一〇位と比較的上位にある。この結果、両省の人口密度はきわめて高い。一平方キロメートル当りの人数で見ると、江蘇省は全国最高の五七四人で、浙江省も全国平均の一〇二人を大きく上回る三七三人であった(以上いずれも一九七九年現在)。また両省は穀倉地帯でありながら、一人当りの耕地面積は全国平均(二・九ム、一ムは六六六平方メートル)を大きく下回ってそれぞれ一・四ム(江蘇省)、〇・八ム(浙江省)にすぎない。こうした状況下で、両省にとって地域経済開発を進めるうえで、農村の余剰労働力をいかに活用するかは大きな課題であった。

(3) 資源不足

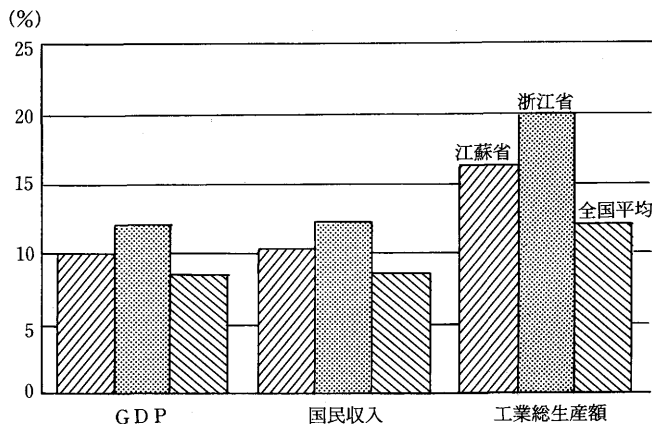
資源、とりわけエネルギー・原材料不足も江蘇省と浙江省に共通する初期条件の一つであった。一人当り自然資源(水、エネルギー、鉱物、土地、耕地面積など)の保有量を見ると、浙江省と江蘇省はそれぞれ全国の二八位と二七位(上海、天津など直轄市を除く)の最低レベルにあった。⁽³⁾すなわち、両省は石炭や石油をはじめほとんどのエネルギー・原材料を域外供給に依存しており、自給できるのは軽工業用の原材料の一部(農産物)にほぼ限られている。

改革・開放下地域經濟發展戰略の展開

市場指向の改革路線の確立は、江蘇省と浙江省の經濟發展に大きな転機を与えた。両省は、一九八〇年代中国の改革・対外開放の実験地域として指定された華南地域の広東省と福建省のように特別な政策的優遇を与えられることはなかったものの、自らの初期条件をふまえた適切な發展戰略のもとで、華南地域に匹敵する全国トップレベルの經濟成長を実現した。

両者の地域發展戰略には具体的な点では多少の違いがあるが、その基本的な発想は共通しており、ともに「揚長避短（自らの優位性を生かして弱点を避ける）、省外循環」と要約される。まず第一に、比較的生産性の高い農業を資本の蓄積源として郷鎮企業を育成する。これによって余剰労働力の吸収に努める。第二に、豊富な労働力や消費財関連加工産業の基盤を活かし、産業構造を比較的収益性の高い労働集約型加工産業にシフトさせる。第三に、

図3-1 江蘇省と浙江省の經濟成長（1979～91年）



(注) 実質年平均成長率。

(出所) 表3-1に同じ。

「省外市場向き貿易加工型経済」を構築することによって、エネルギー・原材料資源の不足を克服する。

こうした発展戦略は功を奏し、一九七〇年代末以降、両省はともに高度の経済成長期に入った。七九年から九一年までの十四年間ににおけるGDP(国内総生産)、国民収入、工業総生産額の年平均伸び率(いずれも実質)で見ると、浙江省は二・一%、一二%、二〇%とそれぞれ高く、江蘇省もそれぞれ一〇・一%、一〇・三%、一六・四%といずれも全国平均を大きく上回っている(図3-1)。とりわけ浙江省の工業の伸び率は全国トップとなっており、注目に値する。

2 急上昇する経済的インパクト

省経済の好調な成長パフォーマンスを背景に、中国経済における江蘇省と浙江省のステータスは向上してきた。全国のGDP、国民収入、工業総生産額に占めるシェアで見ると、浙江省はそれぞれ一九七八年の三・四%、三・六%、二・八%から九一年の五・〇%、五・三%、六・四%までに大幅に上昇した。江蘇省も同時期に六・九%、六・九%、七・二%から七・三%、七・八%、一・二%へと拡大した(表3-2)。この結果、全国のGDP、工業

表3-2 中国経済における江蘇省と浙江省
(全国=100)

| | 江蘇省 | | 浙江省 | |
|---------|------|------|------|------|
| | 1978 | 1991 | 1978 | 1991 |
| GDP | 6.9 | 7.3 | 3.4 | 5.0 |
| 国民収入 | 6.9 | 7.8 | 3.6 | 5.3 |
| 工業総生産額 | 7.2 | 11.2 | 2.8 | 6.4 |
| 農業総生産額 | 7.6 | 7.1 | 4.7 | 5.8 |
| 固定資本投資* | 3.9 | 9.9 | 1.8 | 4.4 |
| 小売総額 | 5.5 | 6.1 | 4.2 | 5.0 |

(注) *1978年は国営部門のみ。
(出所) 表3-1に同じ。

総生産額における浙江省の順位は七八年にはともに十二位であったが、九一年には七位と五位へ躍進し、江蘇省の工業も三位から一位に上昇した。一方、一人当りGDPでみても、江蘇省と浙江省の経済パフォーマンスの向上が反映されている。七八年と九一年の全国の平均水準をそれぞれ一〇〇とした場合、江蘇省は当初の一・四・七から一・三・七になり、浙江省も八七・七から一・三六・二へと急上昇した。

このように、GDPや国民所得など省経済のマクロ指標から省住民の生活水準の向上まで、一九七〇年代末以降、江蘇省、浙江省はともに大きな成果を上げ、中国経済を支える新たな柱になりつつある。

第2節 地域経済の成長メカニズム

周知のとおり、中国は改革・開放政策の下で、一九八〇年代を通じて世界でもトップレベルの経済成長を遂げた。その原動力となったのは、市場経済メカニズムを積極的に取り入れた広東省、浙江省、江蘇省などの沿海地域であった。これら地域の成長メカニズムを比較すると、広東省は改革・対外開放の実験区として中央政府から多くの優遇政策を与えられ、外資導入・輸出振興型の外向き発展戦略に立脚し成功した。これに対し、江蘇省と浙江省は国内中心の資金と市場構造を背景とする内的発展

メカニズムにもとづいてハイレベルの経済成長を実現した。そこで、このような江蘇省と浙江省の内の成長メカニズムをまずそれぞれ、(1)企業、(2)資本、(3)産業、(4)市場構造の四つの側面から解明し、そして他の地域への示唆を探ってみることにする。

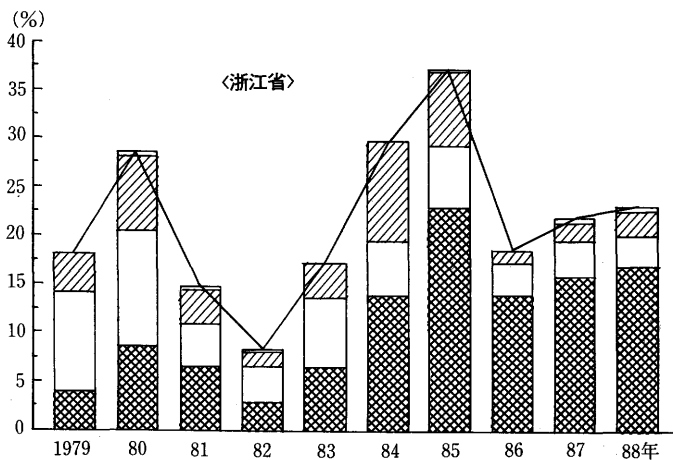
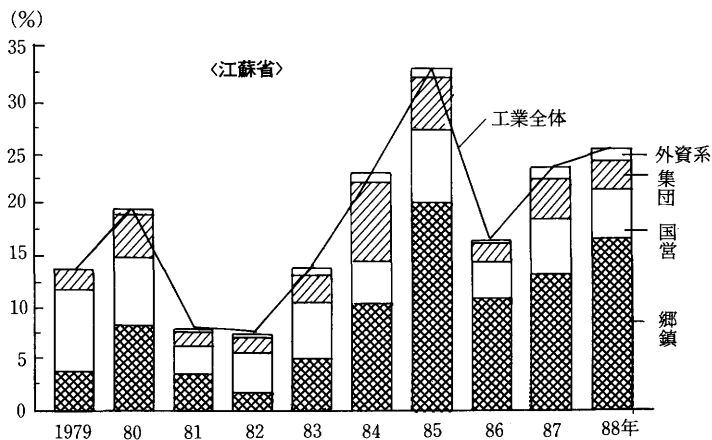
1 郷鎮企業中心の企業構造

従来の計画経済体制のもとで国民経済を支えてきた国営企業の状態が低下し、郷鎮企業や外資系企業を中心とする民間部門が急速に成長してきたのは改革・対外開放路線の成果であり、一九八〇年代における中国経済の活性化の最大要因の一つでもある。江蘇省と浙江省の高度成長を促したのはまさにこうした民間部門、とりわけ郷鎮企業を中心とする非外資系民間セクターであった(図3・2)。

具体的には、一九七〇年代末以降、江蘇省と浙江省の郷鎮企業の年平均実質伸び率(工業総生産額ベース)はそれぞれ二七・八(江蘇省、七九〇九一年)、三四・四%(浙江省、七九〇八九年)に達した。この結果、工業総生産額に占める郷鎮企業のシェアはそれぞれ七八年の一八・五%(江蘇省)、一六・八%(浙江省)から九一年の四六・四%、四九・六%とともに全国平均の二三%を倍以上も上回るにいたった(表3・3)。農村で生まれ市場経済の波に鍛えられた郷鎮企業は、今や両省の経済を支える主役にまで成長したと言っても過言ではない。

国家の政策的意向を反映し国家によって創設、運営される国営企業とは異なり、郷鎮企業は基本的

図 3-2 工業成長に対する郷鎮企業の寄与度



(注) 工業總生産額の対前年比実質成長率。

(出所) 国家統計局總合司編『全国各省・自治区・直轄市歴史統計資料匯編 (1949-1989)』, 中国統計出版社, 1990年, より算出。

に耕地面積に比して人口が多過ぎるという、生存に係わる農民の切迫した意識のもとで自然発生的に生まれたものである⁽⁵⁾。それゆえに、一口に郷鎮企業といっても、各地域がそれぞれの自然環境、人的資源などによって異なる形態をもっている。これまでの江蘇省と浙江省の郷鎮企業の発展過程を概観すると、以下のように集団所有と私的所有の二つのタイプに大別することができよう(表3-3)。

集団所有型郷鎮企業⁽⁶⁾

郷鎮企業のなかで最も多いのは集団所有型である。これは郷(鎮)や村など農村自治体が所有

表3-3 所有別企業構成の変遷

〈企業構成の変遷〉

(工業総生産額=100)

(%)

| | 国営企業 | | | 集団企業 ¹⁾ | | | 郷鎮企業 ²⁾ | | | その他 | | |
|------|------|------|------|--------------------|------|------|--------------------|------|------|-----|-----|------|
| | 江蘇省 | 浙江省 | 全国平均 | 江蘇省 | 浙江省 | 全国平均 | 江蘇省 | 浙江省 | 全国平均 | 江蘇省 | 浙江省 | 全国平均 |
| 1978 | 61.5 | 60.8 | 77.6 | 20.1 | 22.4 | n.a. | 18.5 | 16.8 | n.a. | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1984 | 47.0 | 44.0 | 69.1 | 20.2 | 24.0 | n.a. | 31.0 | 31.2 | n.a. | 1.8 | 0.7 | 1.2 |
| 1988 | 34.7 | 31.3 | 56.8 | 16.8 | 20.8 | 14.3 | 45.6 | 46.6 | 21.8 | 2.9 | 1.3 | 7.1 |
| 1990 | 34.3 | 31.2 | 54.6 | 16.4 | 19.1 | 13.2 | 45.3 | 47.6 | 22.4 | 4.0 | 2.1 | 9.8 |
| 1991 | 33.1 | 29.5 | 52.9 | 15.2 | 18.1 | 12.7 | 46.4 | 49.6 | 23.0 | 5.3 | 2.8 | 11.4 |

(注) 1) 都市部の集団所有制企業。

2) 農民を主体に作られた集団、または個人所有の企業。

〈江蘇、浙江の郷鎮企業の構成〉

(%)

| | 江 蘇 省 | | | | | 浙 江 省 | | | | |
|------|---------|------|------|-----|----------|---------|------|------|------|----------|
| | 集 団 所 有 | | | | 私的 所有 | 集 団 所 有 | | | | 私的 所有 |
| | 郷所有 | 村所有 | その他 | | | 郷所有 | 村所有 | その他 | | |
| 1985 | 97.1 | 54.9 | 39.1 | 3.1 | 2.9 | 95.5 | 48.9 | 38.7 | 7.9 | 4.5 |
| 1988 | 93.2 | 52.6 | 38.4 | 2.2 | 6.8 | 91.7 | 49.1 | 32.1 | 10.5 | 8.3 |
| 1989 | 92.3 | 51.9 | 38.3 | 2.1 | 7.6 | 88.8 | 48.3 | 30.8 | 9.7 | 11.2 |
| 1990 | 91.7 | 51.3 | 38.3 | 2.1 | 8.3 | 86.3 | 47.2 | 30.0 | 9.1 | 13.8 |
| 1991 | 92.6 | 53.0 | 38.5 | 1.1 | 7.4 | 85.4 | 49.0 | 29.1 | 8.3 | 13.6 |

(注) 各省の郷鎮企業の名目総生産額を100とする。

(出所) 表3-1に同じ。

する形態をとっており、伝統的に農業が発達し交通が便利で都市に近接する地域、たとえば蘇州や無錫、常州を中心とする江蘇省南部や杭州、嘉興、湖州を中心とする浙江省北部の農村地域で急速に拡大してきた。

この集団所有型郷鎮企業は郷鎮企業の最も代表的な形態として一九八〇年代に入ってから急速な成長を実現したのであるが、その前身は人民公社体制のもとの「社隊企業」、すなわち人民公社（現在は郷）や生産大隊（人民公社の下部組織で、現在は村）所有の集団企業であった。江蘇省南部と浙江省北部は中国の代表的な穀倉地帯であり、人民公社時代においても農業の生産性が比較的安定的に成長してきたために、人民公社や生産大隊など集団レベルにおいて一定の資金蓄積があつた。一方、人口の急速な増加と農業生産性の向上による余剰労働力の増加はこれらの地域にとつていちだんと大きな問題となつていた。農業労働力を工業や商業などの非農業部門へ移転することが唯一の解決手段であつたが、自身も多くの余剰労働力を抱えている都市部にはほとんど吸収能力はなかつた。また、従来の社会主義計画経済体制のもとでは、私営企業は資本主義のものとして禁止されていた。このため、人民公社や生産大隊が所有し、農業による資金蓄積を基本原資とする「社隊企業」は、当時の体制に適合し、かつ農村地域の直面する余剰労働力問題を緩和するものとして誕生した。こうした「社隊企業」のほとんどは、当初都市に近隣する立地上の優位性を活かす都市工業の廃物利用および農産品加工、農機具修理を中心に事業を展開していたが、改革以降の規制緩和にともなつて、電子・機械や化学、冶金、建材など他の産業にも積極的に進出することによつて、地域経済の発展を促す主役にまで成長した。

私的所有型郷鎮企業

このような集団所有型郷鎮企業とは対照的に、私的所有型の郷鎮企業は数は少ないものの、立地条件が悪く比較的遅れた農村地域で急成長をみせた。浙江省温州は私的所有の郷鎮企業が最も発達した地域である。

浙江省東南沿海部に位置する温州は、山地が多く人口が過密なため、一人当り耕地面積は全省平均の〇・八三ムーの半分以下で、わずか〇・四ムーしかない。一方、最も近くにある地方中核都市である杭州からも四〇〇キロメートル以上離れており、しかも鉄道がなく外部との連絡がきわめて不便である。さらに地理的に台湾に近いことから、改革までの長い間国防の最前線として位置づけられており、国家による大規模な工業投資はまったく行なわれなかった。このため温州人には、個人や家庭単位で零細な工業や商業を営む伝統があった。これは生計を維持していくうえで不可欠のことであった。個人経営の許可や人口移動統制の緩和などを含む一九七〇年代末からの一連の改革は、こうした温州経済の傾向をいっそう強める役割を果たした。この結果、八七年時点で、私的所有、すなわち個人や家族経営の郷鎮企業はすでに温州の工業総生産額の六四・六％を占めており、温州経済を支える最も重要なセクターとなった。⁽¹⁾

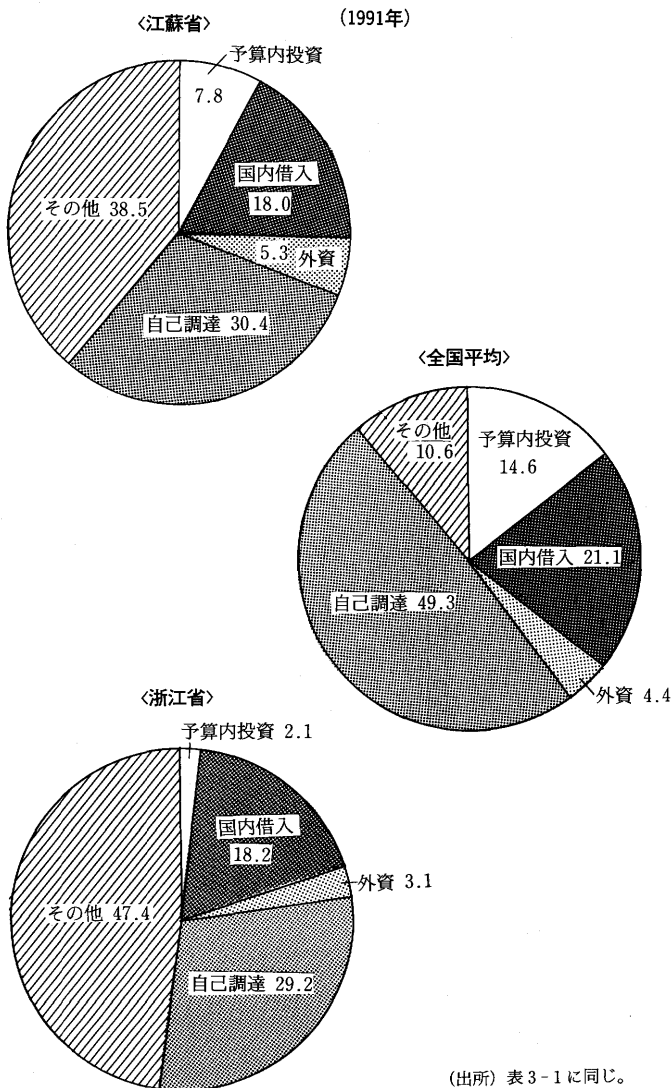
2 域内民間資本依存の資本蓄積構造

すでに述べたように江蘇省も浙江省も改革以前の体制のもとでは、国家による投資の重点地域ではなかったために、国家投資がきわめて少なかった。また両省は、香港や台湾など海外資本の導入に際しても、広東省と福建省のような政策的な優遇措置と立地上の優位性をもっていなかった。一九七〇年代末以降、資金供給の面で同地域の高成長を支えるうえで最も重要な役割を果たしたのは民間、なかでも域内民間資本であった。

まず固定資本形成に相当する全社会固定資本投資の構成から、資金調達における江蘇省と浙江省の特徴を明らかにしよう。

中国の統計では、全社会固定資本投資は、資金源別に「予算内投資」、「国内借入」、「外資」、「自己調達」と「その他」の五つに分類されている。この分け方に従って江蘇省と浙江省を全国の平均と比較してみると(図3-3)、次の三つの特徴を指摘することができる。第一は「予算内投資」、すなわち国家財政の配分などによる投資の比率が低いことであり、第二は個人の出資などによる「その他」の投資の比率がきわめて高いことである。そして第三は外資の比率が相対的に低いことである。具体的に、「予算内投資」の比率では、全国平均の一四・六％に対し、江蘇省と浙江省はそれぞれ七・八％、二・一％とかなり低い。一方、「その他」の投資の比率では、江蘇省と浙江省は全国平均の一〇・六％を大きく上回る三八・五％、四七・四％に達している。より注目に値するのは、投資資金の外資への

図3-3 全社会固定資本投資構成比較 (%)



(出所) 表3-1に同じ。

表3-4 1985～91年外資導入実績¹⁾

(単位:1,000万ドル, %)

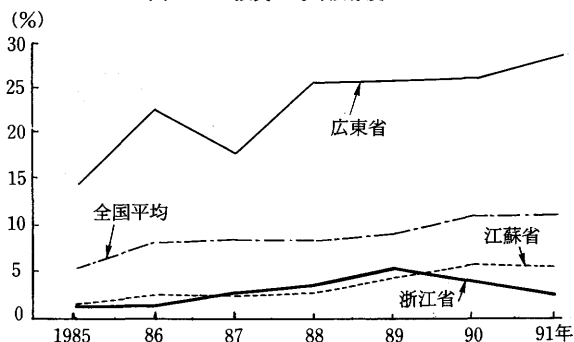
| | 江 蘇 省 | | | | 浙 江 省 | | | |
|---------|--------|------------------|-------|------|--------|------|-------|------|
| | 総 額 | 比率 ²⁾ | 直接投資 | 比率 | 総 額 | 比率 | 直接投資 | 比率 |
| 1985 | 9.33 | 2.01 | 1.19 | 0.72 | 6.21 | 1.34 | 1.63 | 0.99 |
| 1986 | 18.25 | 2.51 | 1.81 | 0.97 | 4.94 | 0.68 | 1.85 | 0.99 |
| 1987 | 21.42 | 2.53 | 4.96 | 2.15 | 11.40 | 1.35 | 2.34 | 1.01 |
| 1988 | 26.48 | 2.59 | 10.30 | 3.23 | 18.80 | 0.93 | 2.96 | 1.13 |
| 1989 | 38.27 | 3.80 | 9.46 | 2.79 | 26.92 | 1.54 | 5.25 | 1.70 |
| 1990 | 43.86 | 4.51 | 14.11 | 3.92 | 16.24 | 1.58 | 4.84 | 1.39 |
| 1991 | 47.50 | 4.67 | 23.32 | 5.15 | 17.19 | 1.49 | 9.16 | 2.10 |
| 1985～91 | 205.11 | 3.28 | 65.17 | 3.21 | 101.69 | 1.63 | 28.04 | 1.38 |

(注) 1) すべて実行ベース。

2) 表中の「比率」はすべて、全国に占めるシェアを示す。

(出所) 表3-1に同じ。

図3-4 投資の対外依存度



(注) 投資の対外依存度=外資の受入れ総額/固定資本投資

(出所) 表3-1に同じ。

依存度が低いことであろう。これは経済成長メカニズムを検討するうえで興味深い。一九八〇年代において江蘇省、浙江省と並んで高成長を達成した広東省と比較して大きく異なる点でもある。周知のとおり、香港を中心とする大規模な海外投資は広東省の高成長を促すうえできわめて大きな役割を果たした。しかし江蘇省、浙江省の場合は、表3-4、図3-4に示すとおり、海外投資の規模は広東省はもとより、全国平均と比べてもかなり低い水準にある。以上のような三つの特徴から、八〇年代を通じての江蘇省、浙江省のハイレベルの経済成長を支えたのは基本的に域内民間投資であるといえよう。

次に、地域経済の主役が郷鎮企業であることから、郷鎮企業を中心に江蘇省、浙江省の資本の蓄積構造を見てみると、生産性の高い農業を蓄積源とするタイプと出稼ぎ送金を主要な蓄積源とするタイプの二つに分類することができる。

高生産性農業を主要な蓄積源とする郷鎮企業

まず高生産性農業を主要な蓄積源とするタイプについては、江蘇省南部や浙江省北部を中心とする集団所有の郷鎮企業がきわめて発達している地域でよくみられる。前にも述べたとおり、これらの地域は中国屈指の農業の耕作条件に恵まれており、人民公社体制のもとでも農業生産性が安定的に向上してきた。江蘇省蘇州を例にみると、一九五七年から七九年までの二十三年間において、全国の農業総生産額の年平均伸び率が五・四％であったのに対して、蘇州は六・一％であった。また、一ムー当りの食糧生産量も二七一キログラムから七二五キログラムへと二・七倍も増加し、同期全国平均の一・

九倍増を大きく上回っていた⁽⁸⁾。人民公社体制のもとでは、土地や農機具などほとんどすべての生産要素が集団の公的所有となっていたために、農業収益の相当の部分は「公益金」や「公的積立金」などの形で集団、とりわけ自然村をもとに組織された生産隊に留保された。同じく蘇州の例でみると、農業収入の約一割以上が集団留保とされ、その額も五七年の二〇〇〇万元から七九年の二・一五億元まで膨らんだ⁽⁹⁾。こうした集団への留保資金は七〇年代末以降急速な拡大をみせた郷鎮企業⁽⁹⁾の最も主要な創業資金源となった。

出稼ぎ送金を主要な蓄積源とする郷鎮企業

一方、出稼ぎ送金を主要な蓄積源として活用していたのは、経済的に比較的遅れており、私的所有の郷鎮企業が発達した地域である。先に述べた浙江省温州はその最も典型的な例である。

前述のとおり、温州は交通が不便で経済が非常に遅れていた。このため、伝統体制のもとで厳しい統制があったにもかかわらず、個人や家庭単位で零細な工、商業を営むことと並び、出稼ぎは伝統的に温州農民の生計を支え余剰労働力を消化する主要な手段だったのである。表3-5に示したとおり、当局の把握した範囲でも毎年農村総労働力の約一割に相当する人数が出稼ぎに行っており、しかもそれは経済改革の進展にともなって年々増加している。

表 3-5 1984～86年温州農村出稼ぎ概要

| | 農村総労働力 | 出稼ぎ労働力 | | (b)/(a) | 出稼ぎ所得 | |
|------|----------|---------|------|---------|-------|--------------|
| | (a) (万人) | (b)(万人) | 省外 | (%) | (億元) | 農業総生産額に対する比率 |
| 1984 | 234.4 | 19.4 | n.a. | 8.3 | 6.0 | n.a. |
| 1985 | 258.3 | 25.1 | 17.8 | 9.7 | 7.8 | 50.1 |
| 1986 | 267.4 | 29.1 | 20.4 | 10.9 | 9.0 | 53.4 |

(出所) 浙江省統計局の資料等により試算。

また一九八五年と八六年の出稼ぎ所得が、それぞれ温州市農業總生産額の五〇・一%、五三・四%に相当していたことにみられるように、經濟基盤が脆弱な温州にとって、出稼ぎによる収入はきわめて重要な意味をもっていた。

私的所有の鄉鎮企業は温州經濟を支える主役であるが、こうした私的所有の鄉鎮企業は、同じく民間セクターである郷や鎮など農村自治体所有の鄉鎮企業に比べて、銀行や信用合作社など金融機關から融資を受けることがきわめて困難であつた。このため江蘇省や浙江省の他地域の集團所有の鄉鎮企業と比べると、温州企業の經營資金における自己資本の比率は約三分の二以上ときわめて高い。出稼ぎ送金はこうした自己資本の最も重要な資本蓄積源となつていた。⁽¹⁰⁾

一方、温州では民間資金市場が比較的発達しており、これが温州企業の主要な外部資金の調達源となつていた。民間資金市場からの調達コストは銀行融資などより相当高いものの、温州企業にとっては自己資金に次ぐ最も有力な資金源となつていた。⁽¹¹⁾ たとえば一九八五年に行なわれた温州市蒼南県のサンプル調査によると、資金總需要のうち外部資金の六二%は民間資金市場に依存していたとされる。⁽¹²⁾

域内民間資金にもとづく拡大

以上で述べたように、集團農業や農民個人の蓄積など域内民間資金が鄉鎮企業創設のための資金源となつてゐる。これに加えて、鄉鎮企業の營業利益による再投資と農民個人の出資が同企業の拡大にも大きく貢献してきた。たとえば現地でのヒアリング調査によると、江蘇省南部地域の鄉鎮企業は平均して税引き後利益の三分の二を企業の拡大生産のための再投資に回しているという。また、浙江省

においては、政府が郷鎮企業の税引き後利益の二分の一以上を再投資しなければならないと明確に規定している。

一方、農民個人の資金も郷鎮企業の成長を支えるうえで大きな役割を果たしてきた。江蘇省と浙江省の農民所得は他の地域と比較してきわめて高く、農民一人当りの所得で見ると浙江省は全国一位で、江蘇省は同三位（一九九一年現在）となつている（北京、上海、天津の三つの直轄市を除く）。これは郷鎮企業の発達とも関連している。加えて、同地域の農民は節約志向が強く実業を起こす伝統をもっており、「集資（企業や個人の共同出資）」による資金調達が盛んに行なわれている。ちなみに九一年時点で温州には、「集資」という形の株式会社は約二万社あるが、そのうち約一・五万社は工業関連の企業であり、その工業総生産額は同地域の農村工業総生産額の七九％を占めるにいたつて⁽¹³⁾いる。

3 加工産業中心の産業構造

地下資源に乏しく農業が発達している江蘇省と浙江省は、伝統的に加工産業、とりわけ紡績や食品など日用消費財関連の加工産業を中心とする産業構造をもっている。このため軽工業の比率が高い。一九九一年現在、全国の工業総生産額に占める軽工業の比率は四八・九％であるのに対して、江蘇省と浙江省はそれぞれ五三・二％、六五・二％となつて⁽¹⁴⁾いる。

表3-6に示すとおり、紡績、食品・飲料、機械、化学工業はともに両省の地域経済を支える四大産

業となっており、合計すると江蘇省と浙江省の工業総生産額のそれぞれ四七・七%、四八・一%を占めている。なかでも紡績産業のシェアが高く、特化係数もそれぞれ一・七（江蘇省）、二・〇（浙江省）となっており、全国レベルでも同産業への集中は際立っている。

こうした江蘇省と浙江省の産業構造の形成には、主として以下のような要因をあげることができる。

(1)すでに述べたように、江蘇省と浙江省は中国の近代産業発祥の地であり、とりわけ紡績や機械産業においては、高い技術の蓄積や産業基盤をもっていた。一方、両省は建国後改革までの約三十年間において、国家による投資の重点地域ではなかったために、化学産業以外に大規模な国家投資がほとんど行なわれなかった。

(2)重工業は、その育成に多くの投資を必要としながら、雇用創出効果が小さい。一方、軽工業は投資額が少なく、雇用創出効果も大きい。ため、多くの余剰労働力を抱える両省にとってきわめて有利である。

(3)中国の経済改革は加工産業、とりわけ軽工業関連の加工産業

表3-6 江蘇省、浙江省の主要産業¹⁾

| 業 種 | 生産高 (億元) | | 省工業総生産額 でのシェア(%) | | 全 国 同 産 業 でのシェア(%) | | 特化係数 ²⁾ | |
|--------|-------------|-------|---------------------|------|-----------------------|------|--------------------|-----|
| | 江蘇省 | 浙江省 | 江蘇省 | 浙江省 | 江蘇省 | 浙江省 | 江蘇省 | 浙江省 |
| 紡 績 | 488.6 | 262.3 | 19.8 | 24.4 | 19.3 | 11.4 | 1.7 | 2.0 |
| 食品・飲料 | 175.7 | 95.8 | 7.1 | 8.9 | 9.5 | 5.8 | 0.8 | 1.0 |
| 機 械 | 271.8 | 93.7 | 11.0 | 8.7 | 13.6 | 5.6 | 1.2 | 1.0 |
| 建 材 | 121.0 | 57.0 | 4.9 | 5.3 | 11.5 | 6.4 | 1.0 | 1.1 |
| 化学工業 | 241.4 | 65.5 | 9.8 | 6.1 | 14.9 | 4.4 | 1.3 | 0.8 |
| 電子通信設備 | 128.2 | 26.5 | 5.2 | 2.5 | 16.8 | 4.5 | 1.5 | 0.6 |

(注) 1) 江蘇省は1991年、浙江省は1990年データ。

2) 特化係数=省工業総生産額での当該産業シェア/全国平均シェア。

(出所) 図3-1に同じ。

業から重工業部門へと漸進的に進められてきた。軽工業部門での規制緩和が早くから行なわれ、指令性計画比率の削減、価格自由化などが進められてきた。このため、国家計画の枠から外された郷鎮企業によって地域経済が支えられている江蘇省と浙江省にとって、軽工業部門への参入が比較的容易である。

(4) 不合理な価格体系が是正されていない状態のもとで、軽工業部門の収益率は重工業部門より高い⁽¹⁵⁾。

4 国内中心の市場構造

加工業中心の江蘇省と浙江省は、原材料調達から製品の販売まで外部市場に大きく依存している。とりわけ国内域外市場の占める割合が大きい。統計上、その実態を精密に把握することは非常に困難であるが、地域間交易状況と輸出依存度の低さからその一端をうかがうことができる。

まず、地域間の交易状況から見てみよう。一九八四年の浙江省の産業連関表にもとづいて計算した結果、同省の軽工業製品の五一・八%、重工業製品の六〇・八%が域外の国内市場で販売されている⁽¹⁶⁾。さらに産業別に見ると、有色金属、石炭・コークス、化学繊維などエネルギー・原材料が域外からの移入に頼っているのに対して、ゴム・プラスチックやアパレル、化学・薬品、製紙・文具用品など加工業部門は大きく域外の市場に依存している(表3-17)。一方、江蘇省についても工業用原材料と販売市場の七〇%がともに域外市場に依存している模様である⁽¹⁸⁾。

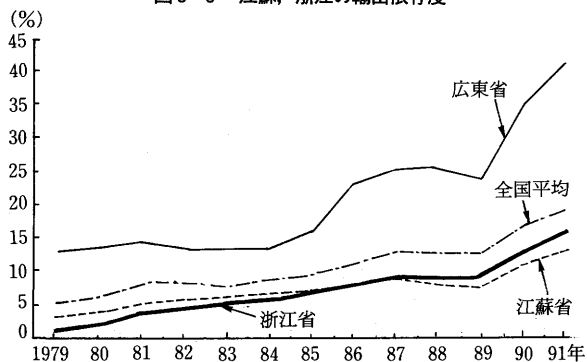
表3-7 浙江省産業別純移出入率

| (%) | | | |
|-----------|------|-----------|------|
| 純移入品目 | 純移入率 | 純移出品目 | 純移出率 |
| 農 業 | 5.8 | 機 械 製 造 | 20.7 |
| 有 色 金 属 | 61.7 | 化 学 ・ 薬 品 | 33.5 |
| 石炭・コークス | 87.8 | ゴム・プラスチック | 48.7 |
| 石 油 加 工 | 40.3 | 紡 績 | 27.2 |
| 電 力 | 19.6 | 食 品 | 21.7 |
| 化 学 繊 維 | 58.3 | 製 紙 ・ 文 具 | 30.9 |
| 重 化 学 工 業 | 29.8 | ア パ レ ル | 36.1 |

(注) 純移出・入率 = (移出・入額 - 移入・出額) / (移出額 + 移入額) × 100%

(出所) 馬洪他編『中国地区発展と産業政策』, 中国財政経済出版社, 1991年, 546ページ。

図3-5 江蘇, 浙江の輸出依存度



(注) 輸出依存度 = 輸出額 / GDP

(出所) 表3-1に同じ。

一方、輸出依存度の低さからも、両省の市場構造が国内中心であることがわかる。図3-5に示したとおり、江蘇省と浙江省の輸出依存度(輸出額/GDP)は同じく高成長を誇った広東省に及ばないばかり

りか、全国平均をも大きく下回っている。

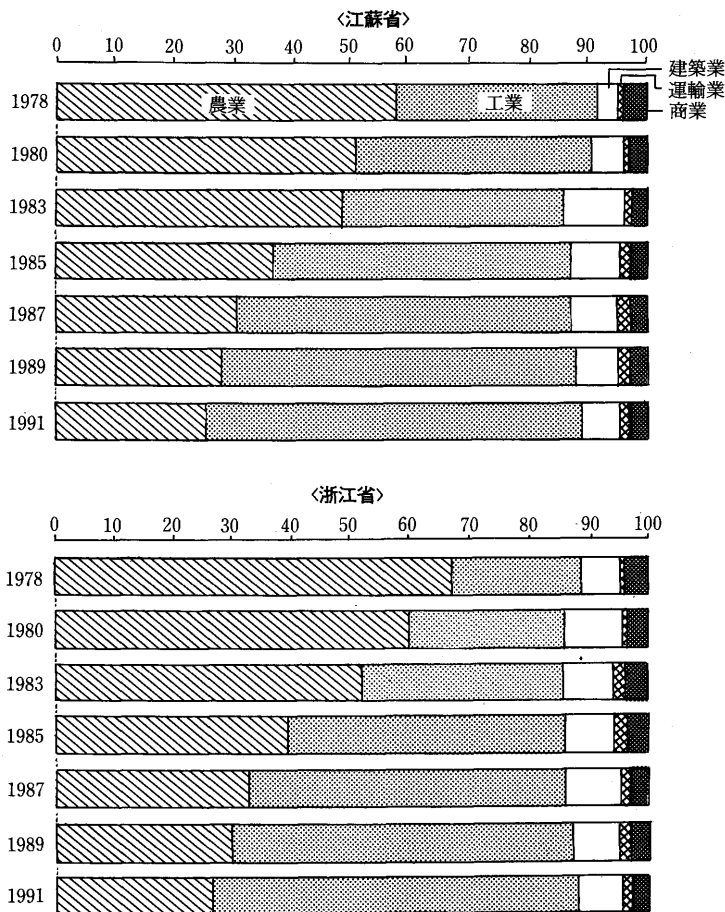
5 「江浙モデル」の示唆

以上で見たように、江蘇省と浙江省は資金の調達から販売市場まで、基本的に国内に立脚しながら経済成長を果たしてきた。このような江蘇省と浙江省の経験を「江浙モデル」としてとらえた場合、同モデルは農村工業化の一つのモデルとしてきわめて重要な可能性を示唆している。

郷鎮企業の活躍は両省にとって単に成長スピードを加速させただけではなく、伝統的に農業地帯であった両省の工業化にとつてもきわめて重要な役割を果たした。この点は主として、(1)農村経済構造の再編成と(2)農業労働力の工業部門への移動の二つの側面からみることができる。

まず前者については、前述のとおり、従来江蘇省と浙江省は中国の中でもとりわけ農業のウェイトが高い地域であった。一九七〇年代末以降の郷鎮企業の飛躍的発展は、こうした農業中心の経済構造に根本的な変化をもたらした。これは両省の産業別農村社会総生産額構成の推移によって明白である。図3-6の示すとおり、八五年以前は両省の農村経済構造は文字どおり農業を中心としていたが、八五年には農村社会総生産額に占める農村工業、すなわち郷鎮企業の総生産額の比率は農業の三七・二%、三九・二%を上回り、それぞれ四九・七%、四六・二%に達した。九一年には、同比率はそれぞれさらに六三・五%、六一・七%といちだんと高まっている。そのうえ建設業や運輸業、商業など非農業

図3-6 農村経済構造の再編成



(注) 農村社会総生産額を100とする。

(出所) 表3-4に同じ。

部門を加えると、郷鎮企業の生産比率は全体の七割以上に達する。江蘇省と浙江省の農村経済の工業化は着実に進んでいることがうかがえる。

このような工業化に向けての経済構造の再編成は、当然のことながら農村の社会構造にも大きな変化をもたらした。これを最も顕著に表わしたのは農村労働人口の非農業部門、とりわけ工業部門への移動および都市部と農村の所得格差の縮小であろう。

農業から非農業部門への労働力の移動は、開発途上国が工業化を進めるうえできわめて重要な課題である。ただし中国の場合は、建国以降、人口の自然増と毛沢東時代の「人が多ければ多いほどよい」といった政策的ミスが相まって、人口増加とりわけ農村人口増加の圧力は一般の途上国よりも大きい。一方で、都市部は自らも余剰労働力の消化という大きな課題を抱えているため、急増する農業人口を吸収する能力が限られていた。たとえば改革までの約三十年間において、中国全体の農業から非農業への労働力の移動はわずか五〇〇〇〇〇六〇〇〇万人にすぎなかった⁽¹⁹⁾。この結果、一九七〇年代末の時点では、農村の余剰労働力が総労働者の半分以上に相当する約二億人に膨張していたと推定される。統計上の制約から、同時期の江蘇省と浙江省の農村余剰労働力の規模を明確に把握することはできないが、当時両省は農業労働力のシェアが全国平均を上回っていたことから、工業化の水準は全国平均以下であった(表3-1)ことから推定すると、余剰労働力は相当の規模に達していたと考えられよう。郷鎮企業はこうした余剰労働力の吸収に大きな役割を果たした。たとえば、江蘇省の郷鎮企業は七八年以降、年間平均八〇万人の農村労働力を吸収してきたといわれ⁽²⁰⁾、また浙江省においても郷鎮企業は八二〇九〇年の間に計八〇〇万の農業労働力を吸収した⁽²¹⁾。

郷鎮企業の急速な発展にともない、農民の生活水準は着実に向上し、都市部と農村の所得格差が縮小した。一人当たり消費水準と一人当たり生活費支出の二つの指標から間接的に見ると、まず前者については、一九八〇年を一〇〇とした場合、九〇年時点で江蘇省と浙江省の農村はそれぞれ三六二と三八九に増加したのに対して、都市部は二四八と三四七にとどまった。一方、後者に関しては、江蘇省、浙江省ともに八〇年には都市部が農村の二・二倍であったが、この格差は九一年には一・七倍に縮小した(表3-8)。

このように、江蘇省と浙江省の郷鎮企業は、国家に依存することなく基本的に域内の民間セクターのパフォーマンスによって計画経済体制から持ち越された農村余剰労働力の吸収に大きな威力を発揮した。そのうえ農村部と都市部の所得格差の是正にも大きな役割を果たした。

表3-8 都市部と農村の格差の推移

| | 江 蘇 省 | | | | 浙 江 省 | | | | 全 国 平 均 | | | |
|------|------------------|---------|------------------------|-------|------------------|---------|------------------------|-------|------------------|---------|------------------------|-------|
| | 1人当り生活費支出 (元) | | 1人当り消費水準 (1980=100) | | 1人当り生活費支出 (元) | | 1人当り消費水準 (1980=100) | | 1人当り生活費支出 (元) | | 1人当り消費水準 (1980=100) | |
| | 農村部 | 都市部 | 農村部 | 都市部 | 農村部 | 都市部 | 農村部 | 都市部 | 農村部 | 都市部 | 農村部 | 都市部 |
| 1980 | 194.7 | 434.9 | 100.0 | 100.0 | 191.9 | 428.0 | 100.0 | 100.0 | 162.2 | 439.0 | 100.0 | 100.0 |
| 1982 | 261.4 | 452.3 | 140.7 | 105.5 | 301.9 | 470.9 | 127.7 | 111.4 | 220.2 | 505.9 | 121.4 | 112.4 |
| 1984 | 360.3 | 577.5 | 178.9 | 122.3 | 369.2 | 561.8 | 160.4 | 133.2 | 273.8 | 673.2 | 153.2 | 127.8 |
| 1986 | 499.3 | 866.4 | 234.0 | 158.9 | 560.6 | 968.9 | 233.7 | 120.0 | 357.0 | 799.0 | 202.9 | 178.0 |
| 1988 | 746.6 | 1,238.7 | 333.5 | 208.0 | 838.7 | 1,453.0 | 338.1 | 309.0 | 476.7 | 1,104.0 | 273.4 | 273.7 |
| 1991 | 878.0 | 1,528.7 | 362.4 | 247.5 | 1,026.5 | 1,805.6 | 389.1 | 346.9 | 619.8 | 1,453.8 | 302.9 | 315.6 |

(注) 消費水準については1991年のデータ未入手につき、90年の数字を代わりに示した。

(出所) 『全国各省・自治区・直轄市歴史統計資料匯編(1949~1989)』、および『中国統計年鑑』各年版、などにより作成。

第3節 上海とのリンケージと浦東開発

1 経済的リンケージ

地理的に近いこともあって、江蘇省、浙江省は上海とのつながりが伝統的にきわめて強い。

歴史的にみると、上海の近代産業の形成は江蘇省、浙江省と密接な関係がある。たとえば近代上海の主要産業であつた綿紡績業の発展は江蘇省無錫、南通の綿紡績業の発達に依存しており、浙江省杭州・嘉興・湖州などで成長した絹織関連企業は上海の絹織物業の基盤となつた。江蘇省、浙江省の発達した農業も原材料供給源として上海の消費財産業を支えるうえで大きな役割を果たしてきた。また、かつて世界の先端を走る上海の金融業を牛耳つたのも「浙江財閥」であつた。

建国後、縦割りの行政システムのもとで地域間の経済的リンケージは人為的に遮断された。しかし、江蘇省、浙江省と上海の間には伝統的計画経済の枠外で地縁・血縁など人間関係にもとづく水面下の経済交流がなお多く維持されてきた。とりわけ一九七〇年代末以降郷鎮企業の成長は上海と切り離して語れない。

江蘇省、浙江省の郷鎮企業と上海の企業の協力は主として以下の四つの方法を通じて行なわれてきた。すなわち、(1)郷鎮企業は賃金などの面で優遇条件を提供することによって、上海企業から現職あ

るいは定年後の技術者を迎え、生産の技術指導に当てる。休日を利用して定期的に上海から通つてくる「日曜エンジニア」も数多く活躍している。(2)上海の企業が陳腐化した機械・設備を無償または有償の形で郷鎮企業に譲り、生産に関する技術指導を行なう。(3)郷鎮企業が上海企業の下請生産を行なう。(4)共同出資等の形で合弁企業をつくる。たとえば、江蘇省無錫市には一九八六年の時点で郷鎮企業と都市企業の合弁企業が二〇五五社あったが、このうちの六〇%以上は上海企業との合弁である。また蘇州市の同類の合弁企業の六三%に相当する七一二〇社も上海企業をパートナーとしていた。⁽²⁾

これら一連の協力は、上海の産業構造の高度化を助けた。また上海製品の生産拡大も可能になった。たとえば上海最大のテレビメーカーの第一テレビ工場は江蘇省崑山県の郷鎮企業との合弁によって、自社ブランドのテレビの生産量を拡大した。一方、江蘇省、浙江省の郷鎮企業も技術水準や経営能力の向上を実現した。たとえば浙江省紹興自転車工場は国内最大の自転車メーカーである上海自転車工場の技術指導と商標使用権を受けて「鳳凰」ブランドの自転車を生産し、これが同社の主力商品となった。

2 浦東開発のインパクト

浦東開発がナショナル・プロジェクトとして認可されたことは上海のみならず、江蘇省と浙江省の経済発展にとっても大きなチャンスを与えることになった。浦東開発を地域経済のいつそうの発展の

起爆剤にもしようと江蘇省と浙江省は上海との連携強化に乗り出し、それに向けての一連の戦略が策定された。これと並行して、江蘇省、浙江省と上海の新しい協力関係が形成されつつある。

浦東開発と江蘇、浙江の発展戦略

両省はともに地域発展戦略と経済政策の中で、浦東開発との「接軌（連携）」を強調している。

中央政府は浦東開発を契機に、上海を極東地域の経済・貿易・金融の中心に育て上げるために、外資導入などさまざまな面において特別の優遇政策を与えた。江蘇省と浙江省は浦東開発の波及効果を自らの地域経済開発に取り入れようと、発展戦略を浦東開発計画に合わせて調整した。たとえば、両省はともに第八次五カ年計画（一九九一―一九九五年）において、自らを浦東開発の補完として位置づけ、省内で開発区や保税加工区を整備することによって外資導入を促進しようとしている。江蘇省は省長を团长とする代表団を上海に派遣し、浦東開発の推進にあたって、建築材料の供給や交通・物流の整備、下請生産ネットワークの形成ならびに一部の原材料の供給など七項目にわたる具体的な協力案を示した。また江蘇省は、⁽²³⁾南京から上海まで（全長二七四キロメートル、うち江蘇省域内は二四九キロメートル）の高速道路の建設や長江沿岸沿いの港湾整備に積極的に取り組んでいる。⁽²⁴⁾一方、浙江省も寧波市から省都杭州を経由して上海に至る高速道路（全長三〇〇キロメートル）の早期着工や全国屈指の良港である寧波北侖港（九三年三月現在では拡張中だが、一〇万トン級の鉄鉱石専用バース、一五万トン級の石油バース、五万トン級のバラ積み貨物バースなどがすでに完成）を「上海の外港」とするなどで浦東開発計画との歩調を合わせ、積極的に「呼応する」と表明した。⁽²⁵⁾こうした江蘇省や浙江省など近隣地域の協力姿勢に対して、上海

も九二年七月、浦東開発にあたって長江デルタ地域を対象に土地の使用や企業の設立、市場開放等を含む八項目の優遇措置を発表した。⁽²⁶⁾

浦東開発の波及効果

江蘇省、浙江省の経済発展にとって、浦東開発はさまざまな側面から波及効果ももっている。ここでは上海との新しい協力関係構築の可能性と対外開放の二点を中心に見ることにする。

まず前者から見てみよう。前述のとおり、上海を経済・金融・貿易の中心として復活させるのは浦東開発の最大の狙いである。これを実現するために、上海は産業構造をこれまでの製造業、とりわけ労働集約型製造業中心のものから抜本的に調整する必要がある。この過程において、上海の後背地に立地し、郷鎮企業を中心に労働集約型加工産業に一定の蓄積をもっていた江蘇省と浙江省は上海の伝統産業の移転先として最も有望と考えられる。一方、上海が金融・貿易に特化することは江蘇省、浙江省にとって同市を資金調達や対外貿易の窓口として活用できることから、両省の経済発展にきわめて有利となる。すでに株を上海証券取引所に上場し大きな成功を収めた鳳凰化工⁽²⁷⁾（浙江省の化粧品メーカー）のような例がある。さらに、直接浦東新区の建設にも参加している江蘇省、浙江省の企業もある。一九九一年末まで、浦東新区において全国各地の投資で設立された企業が一二二社あるが、このうちの三三社、三二社がそれぞれ江蘇省と浙江省の企業である。⁽²⁸⁾

一方、江蘇省、浙江省に対する浦東開発の波及効果はすでに対外開放の面でも現われている。浦東開発を契機に中国の改革・開放の中心は広東省と福建省から上海へと北上したことによって、江蘇省、

浙江省は海外資本の対中進出の新たな拠点として注目されるようになった。たとえば、一九九一年の海外直接投資（実行ベース）の前年比伸び率で見ると、江蘇省と浙江省はそれぞれ七一・〇%、八九・二%増であり、同期全国平均のみならず、広東省（二四・九%増）、福建省（同一九・〇%）をも大きく上回った。九二年に入ってから、その勢いはいつそう強くなり、上半期における海外直接投資の伸び率（前年同期比）はそれぞれ江蘇省が一・二倍增、浙江省が三・四倍增を記録した。

今後の課題

ただし、江蘇省、浙江省と上海は有機的な協力関係を構築するに当たっては、なお多くの課題が残っていることも事実である。なかでも最大となる問題は行政の壁であろう。すなわち江蘇省と浙江省の政府は前述のとおり、中央政府の呼びかけに対する呼応や浦東開発の波及効果を狙って上海に協力の姿勢をみせ、上海もこれに応えてはいる。だが、計画経済体制のもとで形成された縦割りの行政システムは、こうした協力を阻害する要因になりかねない。過去にも類似した例があった。一九八四年、中央政府は江蘇省、浙江省と上海市の経済協力を促進するために、上海で「上海経済協力区」という機構を設けたが、地域間の利害関係の調整に難航したため、三年余りで失敗に終わった。ただし今回は、双方にとって明らかにメリットのある浦東開発を前提にしており、また地域の自発的な協力関係が形成されているなどの点でこれまでとは条件が異なる。しかし、行政の壁を根本的に突破するためには双方の努力の他に、中央政府主導の下で行政的強制力のある調整機関の設置が必要と思われる。

注(1) 馬洪、房維中他編『中国地区発展与産業政策』、中国財政経済出版社、一九九一年、四六七ページ。

(2) 中国の第一次産業の概念には耕種農業、林業、牧畜業、副業および漁業が含まれている。

(3) 『管理世界』一九八七年第四期。

(4) 馬洪、房維中、前掲書、五一八ページ。

(5) 無論、税金や銀行融資、行政指導などの側面からの政府の支持も郷鎮企業の育成に一定の役割を果たした。たとえば、浙江省政府が一九八五年四月に策定した『郷鎮企業経済発展に関する規定』においては、(1)経営請負責任制の導入、(2)優遇税制の実施、(3)銀行からの借入れに対する利子補助、(4)技術改善の促進、(5)個人企業に対する集団郷鎮企業並みの優遇政策の導入などが定められていた。

(6) 所有別で中国の企業の属性をみると、「全民所有（すなわち国営）」と「非全民所有」の二つに分類できるが、後者はさらに「集団所有」、「個人所有」と「その他」の三つに細分化することができる。ここでの集団所有型郷鎮企業は「集団所有」のうち、都市部集団所有企業を除く郷以下の農村自治体によって作られた農村企業を意味する。

(7) 楊長永「郷鎮工業成長と発展戦略研究」（『経済地理』一九九二年第一期）。

(8) 陶友之編『蘇南模式与致富之道』、上海社会科学院出版社、一九八八年、三五ページおよび『中国統計年鑑』一九九二年版。

(9) 莫遠人、徐元明編『江蘇鄉村工業成功之秘訣』、南京大学出版社、一九八六年、一一六～一二七ページ、および陶友之、前掲書、三五ページ。

(10) 楊長永、前掲論文。

(11) 温州の民間資金市場は直接貸貸や「個人錢莊」など多種多様な形態があるが、利率は基本的に需給関係にもとづき決定されており、公的融資よりかなり高い。

(12) 張仁寿、李紅『温州模式研究』、中国社会科学出版社、一九九〇年、一二八ページ。

(13) たとえば江蘇省の無錫市と浙江省の紹興市は県クラスの経済力ではそれぞれ全国的一位と八位を占めているが、

「社会主義市場経済」への移行のうねりの中で、一攫千金を夢見て株や不動産に熱中している広東省や山東省など経済先進地域を含む多くの中国の人の目から「時代後れ」と思われるほど地道に製造業中心の事業展開を維持している。また人々の生活は、全国トップクラスの個人所得と思えないほど質素である（『経済日報』一九九二年一月一五日）。

(14) 現地でのヒアリングによる。

(15) 詳しくは、呉軍華「中国の産業構造分析試論」（『現代中国』第六五号）、一一五ページを参照されたい。

(16) 馬洪、房維中、前掲書、五二二ページ。

(17) 蔣岳他編『中国地区発展与産業政策』、中国財政出版社、一九九一年、一五八ページ。

(18) 郷鎮企業は江蘇省と浙江省産業の最も主要な市場開拓者である。たとえば、江蘇省南部と浙江省温州の郷鎮企業だけでもそれぞれ一五万人、一〇万人のセールスマンが全国各地で活躍しているといわれている。

(19) 陳乃醒、董謙『中国郷鎮工業経済学』、经济管理出版社、一九八九年、二四ページ。

(20) 馬洪、房維中、前掲書、四六八ページ。

(21) 『中国統計情報』一九九二年七月二三日。

(22) 陶友之、前掲書、一〇〇ページ。

(23) 顧紀瑞他『中国華東開放地区経済発展戦略研究』、经济管理出版社、一九九二年、二二九ページ。

(24) 『経済日報』一九九三年二月一日等。

(25) 『人民日報』一九九二年七月九日。

(26) 『経済日報』一九九二年七月八日。

(27) 程洋編『上海深圳股票上市公司』、海洋出版社、一九九二年。

(28) 上海社会科学院編『上海経済年鑑』（一九九二年版）、上海社会科学院出版社、一九九二年、一二五ページ。